宝石のくにの出現

パイリン興隆史

The Emergence of Pailin

北川 香子*

KITAGAWA Takako

キーワード：パイリン，カンボジア，鉱業，英国議会資料

KEY WORDS: Pailin, Cambodia, mining, British Parliamentary Papers

Pailin is a municipality located on the western border of Cambodia, which is famous for its production of sapphire. From 1989 to 1997, the district was controlled by the Khmer Rouge as one of their bases against the Phnom-Penh government. The purpose of this paper is to describe the history of Pailin from its beginning to its integration into *Indochine Française*.

In the last half of the 1850s, the sea-port Chantaburi on the Gulf of Thailand was integrated into the international maritime network built by the British Empire, and in 1879, thousands of miners from British Burma immigrated into Pailin via Chantaburi. Gemstones from Pailin were exported to India and Europe from the port of Chantaburi which became a gateway that connected Pailin to the outside world.

Pailin itself belonged to Battambang Province whose governor was subject to the Siamese Court in Bangkok, but most of Pailin inhabitants were British subjects who acquired extraterritoriality. The Siamese Court never tried to control the inhabitants nor gemstones of Pailin directly. The Siamese king gave a title to the chief of the miners and let him govern Pailin autonomously. The miners were free to deal in gemstones in return for paying 3 *bats* annually to their chief.

In 1907, Siam ceded Battambang Province, including Pailin to *Indochine Française*. However, the chief of miners at that time, *Maung Soy*, was opposed to the French authorities and acted like an independent king, thus Pailin was never absorbed into *Indochine Française* effectively until the 1920s.

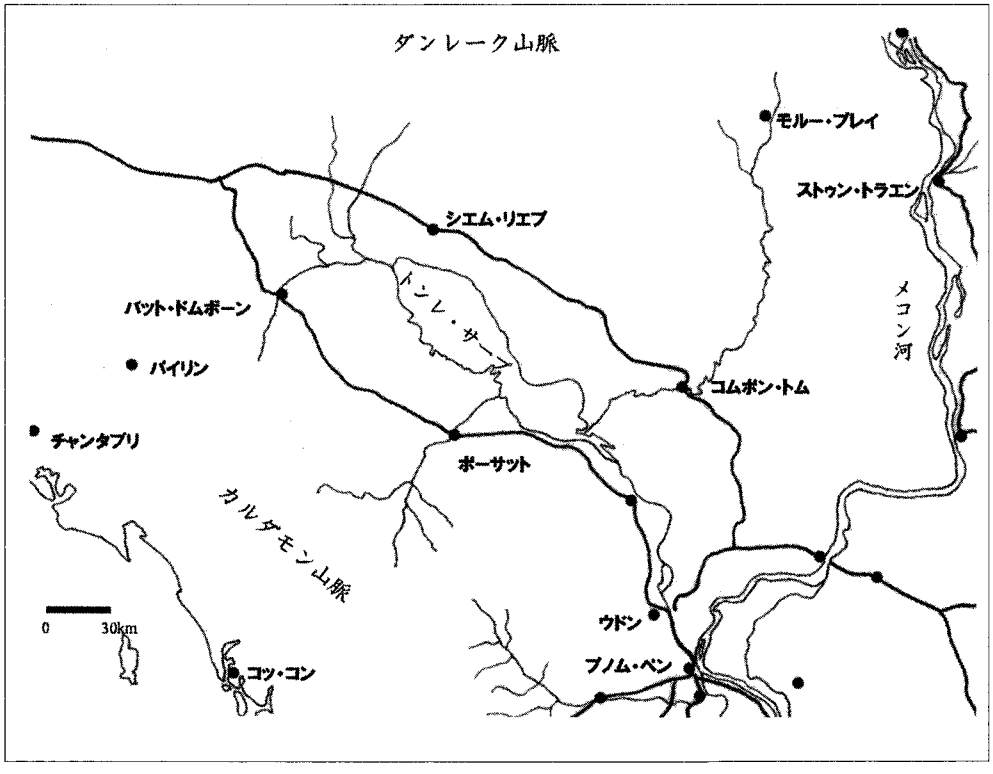
＊地域研究企画交流センター研究員　Research Fellow, JCAS

はじめに

20世紀後半のカンボジア史を叙述する際に最大のテーマとなるのは，内戦とその終結である。カンボジア史上最も血腥い一時代を現出させたクメール・ルージュ Khmer Rouge は，21世紀まで生きのびることはなかった。1990年代の末にようやく，国際的・国内的に承認された唯一の政権によって，カンボジア全土が統治されることになった。カンボジアの現代史においては，ほぼ30年ぶりのことである。

しかしながら，今までに提出されているカンボジア史研究の大半は，独立後のカンボジアがなぜこれほどまでに国家統合に苦しむことになったのかを理解したいという，現在の要請に応えられるものではない。カンボジア研究者のほとんどは，近年著しく進んだ東南アジア研究の成果に全く背を向けて，栄光の古代（アンコール）――衰退のポスト・アンコールという，植民地史学以来の観念を固持してきた。常に研究の前提とされるのは，アンコール時代に完成された「カンボジアの領土」が，ポスト・アンコール期に隣国シャムとベトナムによって蚕食され，ほとんど滅亡しようとしていたところをフランス植民地主義によって救われるという歴史である。そこでは諸王の事跡によって「カンボジア史」が代表され，「カンボジアの領土」と一括されたものの中における個別の地域史あるいは地域性は，全く考慮されないできた。

本稿で取り上げるのは，パイリン Pailin 地域である。パイリンは，現在のカンボジ



パイリン地図

ア王国西端に位置し，サファイアを始めとする宝石の産地として知られている。1989年10月から1996年8月の時期には，クメール・ルージュの一拠点でもあった。現在も，元クメール・ルージュの師団長が市長となり，同派の旧幹部たちの「安住の地」となっている［天川 2001：57］。20世紀末にようやく枠組みが確定したかに見えるカンボジアという国家の領域の中で，今後問題となってくるのは，パイリンを始めとして，プノム・ペン Phnom Penh（プノンペン）の政権が今までコントロールし得ないできた地域であろう。これらの地域では，未だ現地調査は難しい。文献資料による研究のみが可能である。本稿のねらいは，パイリンの興隆過程を解明し，現在のパイリンの地域性，とくにプノム・ペンに対する強固な自立性がどのように形成されてきたのかを説明することにある。さらにパイリンという地名は，カンボジアの地名としては比較的有名であるにも関わらず，我々は地域に関する具体的なイメージを持っていなかった。本稿では資料の引用・要約を多用することによって，パイリンという地域像を可能な限り写実的に叙述してみたいと思う。

1．資料

パイリン研究の最大の困難は，資料が希薄なことである。現在のところ，パイリン側の現地資料の存在は知られていない上に，現地調査が困難である。また，宝石の産出量や地区人口の変化などを示す数量的データの存在も知られていない。そこで本稿がパイリンの興隆過程を描き出すために使用するのは，次に挙げるような，イギリス，フランス側による同時代のパイリン地区の描写である。

1．「英国議会資料」：British Parliamentary Papers（BPP）．地域研究企画交流センター（JCAS）が「京セラ文庫」として所蔵するもののうち*1，以下の10点にパイリン－チャンタブリ地区の宝石鉱山に関する言及がある。

（1）1856. “Abstract of Reports on the Trade of Various Countries and Places, for the Year 1855, Received by the Board of Trade (Through the Foreign Office and the Colonial Office) from Her Majesty's Ministers, Consuls, and Colonial Authorities.”

（2）c-2571. 1880. “Siam. No. 2 (1880). Commercial Report by the Acting British Consul-General in Siam for the Year 1879.”

（3）c-5618-148. 1889. “Foreign Office. 1889. Annual Series. No. 595. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1888 on the Trade of Bangkok.”

（4）c-6205-2. 1890. “Foreign Office. 1890. Annual Series. No. 771. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1889 on the Trade of Bangkok.”

（5）c-6550. 1891. “Foreign Office.

＊1　「英国議会資料」に関しては，『地域研究論集』3－1（2000年）に，「世界を映す大英帝国――『英国議会資料』を読む」という特集がなされているので，それを参照されたい。

1891. Annual Series. No. 938. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1890 on the Trade, & c., of Siam."

（6）c-7919-21. 1895. "Foreign Office. 1895. Annual Series. No. 1653. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1894 on the Trade of Siam."

（7）c-8277-5. 1896. "Foreign Office. 1896. Annual Series. No. 1787. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1895 on the Trade of the Bangkok Consular District."

（8）c-9496-24. 1899. "No. 2353 Annual Series. Diplomatic and Consular Reports. Siam. Report for the Year 1898 on the Trade of the Consular District of Bangkok."

（9）Cd. 352-24. 1900. "No. 2528 Annual Series. Diplomatic and Consular Reports. Siam. Report for the Year 1899 on the Trade of the Consular District of Bangkok."

(10) Cd. 2236-30. 1904. "No. 3286 Annual Series. Diplomatic and Consular Reports. Siam. Report for the Year 1903 on the Trade of Bangkok."

この資料中でパイリンに言及した部分は非常に短く，記述も断片的である。鉱山の経営実態に関わるさまざまな情報も，不明な部分が大きい。例えば1889年以降，バンコクの宮廷はパイリン鉱山の採掘権を外国人に与えてしまっているが，この時いかなる契約が交わされたのか，この資料からは判明しない。その一方で，この資料は年報であり，同時性の高さに大きな利点がある。

2．『バット・ドムボーン地誌』：Brien. 1885-86. "Aperçu sur la province de Battambang." *Excursion et reconnaissance.* 10-11. バット・ドムボーン地方の地勢，住民，産業，商業に関する概説である。

3．『パイリン地誌』：Filleau-de-Saint-Hilaire Gilbert. 1920. "Le district minier de Phailin (Battambang-Cambodge) et l'exploitation de ses gisement de saphir 1915 à 1918." *Revue Indo-Chinoise.* パイリンは1907年に仏領に編入されたが，容易にはフランス植民地支配に馴染まなかった。バット・ドムボーンの理事官による実効支配を確立するために，1915年1月，高等理事官のボードワン氏 M. le Résident supérieur Baudoin は，鉱山地区の調査を命じた。この地誌はその調査結果をまとめたものであり，地勢，歴史，住民およびその習慣，過去－現在－将来への展望からなる。

4．『バット・ドムボーン理事官府定期報告書』：INDO-RSC-00355. 1907-1916. Rapports périodiques, économiques et politiques de la résidence de Battambang. バット・ドムボーン理事官府からプノム・ペンの高等理事官に宛てられた定期報告書である。フランス国立文書館海外部門分館 Centre des Archives d'Outre-Mer (C. A. O. M.) 所蔵*2。

パイリンに関する情報は，断片的なものが広い範囲に散らばって存在している。上

記の資料のほかに，シャム側の資料，実際に鉱山経営を行った英国企業の資料等の発掘が，今後に期待できるであろう。なお，英語・フランス語の資料中に現れる人名・地名などは，可能な限り原語にあたってカタカナ表記を試みたが，中には原語による表記を発見できなかったものがあった。それらは資料中の表記をそのまま残してある。

2.「カンボジア史」と「辺境」

フランスによる保護国化（1863年）前夜，19世紀中葉のカンボジア王国は，トンレ・サープ Tonle Sap 河西岸のウドン Udong を王都とし，①トンレ・サープ南西岸ルート，②コムポート Kampot（タイ湾海港）ルート，③コムポン・ルオン Kompong Luong（トンレ・サープ河港）ルートを建設することによって，トンレ・サープ湖周辺，タイ湾，商都プノム・ペン―メコン Mekong 河を，ウドンを要とする政治的・経済的なネットワークに統合した。このネットワークの北西端はバット・ドムボーン（バッタンバン）Battambang を介してシャムに接続し，南東端はメコン河を介してベトナムに接続していた。フランス植民地期に入り，河川交通路に蒸気船が導入されたことによって，バット・ドムボーン―トンレ・サープ―プノム・ペン―メコン河―サイゴンの経済的な結びつきが強化された。さらに，シャムとフランスの交渉の結果，1907年にバット・ドムボーンがカンボジア領に編入され，タイ湾岸地域では，コッ・コン Koh Kong までの領域がカンボジア領と決定した［Forest 1980：177］。19世紀中葉までに完成したネットワークは，植民地期に拡張され，現在のカンボジア王国の中核でもあり続けている［北川 2001］。

その外郭，すなわち現在のタイ国境地帯であるダンレーク Dangrek 山脈南麓からラオス・ベトナムとの国境地帯である北東部山地まで，同じくタイ国境地帯であるカルダモン山脈からタイ湾岸までの地域については，植民地期以前の記述がほとんど存在しない。王朝年代記にも，これら外郭地域に関する記述が全く現れないことから，おそらく上記の中核地域との関係は，かなり希薄であったのではないかと判断される。

ダンレーク山脈南麓には，トンレ・ルプゥ Tonlé Ropou 地方およびモルー・プレイ Melou Préi 地方があり，1814年頃よりシャムの勢力圏に属していた。19世紀末のこの地域には，「カンボジア人」のやや大きな村落も存在したが，人口の大半はクオイ（クイ）Kouy やペアル Pears と呼ばれる少数民族で，ラオ人も浸透してきていた。人口は希薄で，水田耕作をするか，あるいは森の一角を焼いて米を作り，野生の蜜蠟を集め，獣を狩って物々交換し，時にはクオイが作る鉄のインゴットを貨幣のように用いていた。家族の長たち les chefs de famille は，毎年の税として，3タン thang（1タン＝36リットル）の米と3塊の蠟を地方の領主 Seigneur に納めた。領主はこれを貨幣に換え，あるいは現物のままで，さらに象の歯や犀の角などを加えて，バサック Bassak のチャオ Chau（シャム

＊2　科学研究費補助金「メコン流域開発計画への地域研究的アプローチ」（基盤研究（B）（1））によって，2002年2月23日～3月25日に採集した。

に従属する太守）に納めていた［Aymonier 1900：177-179］。

ストゥン・トラエン Stung Treng は，メコン河にセ・コン Sekong，セ・サン Sesane，スラエ・ポック Srepok の3川が合流する地点にある。1866～68年にド・ラグレ De Lagrée 隊に参加してメコン遠征を行ったガルニエ Garnier の記録によると，当時，ストゥン・トラエンは別名をシエン・テン Sieng Treng といい，シャムに従属するラオ人の太守がいた。ストゥン・トラエンの町には800人の住民がいたが，すべてラオ人であり，内陸は「蛮族 les tribus sauvages」の地であった。ストゥン・トラエンはプノム・ペンとアタプゥ Attopoeu（現ラオス領内）の間の商業中継地で，商権を握っていたのは福建人たちであった。貨幣としては，シャムのティカル tical やメキシコ・ピアストルもわずかに流通していたが，トンレ・ルプゥから運ばれてくる中央の幅3cm，厚さ1cm 以下，長さ14～15cm の平らな菱形の200g の鉄棒が，最も多く流通していた。これは10個が1ティカルに相当し，また1本で鶏2羽を購入できた*3［Garnier 1873：163-166, 170, 172］。

すなわち19世紀には，ダンレーク山脈からメコン河を越えて東北部山地に至る地域は，カンボジアではなく，シャムの政治圏内にあった。これらの地域は1904年にカンボジア王国に編入されたが［Forest 1980：175］，その後も東北タイおよび南ラオスとの交流は継続している。例えば1910年代に入っても，毎年3～5月になると，ラオ人の牛商人がダンレーク山脈を越え，コムポン・トム Kompong Thom 北方のプロム・テープ Promtep の村々を訪れて牛を買い付け［Dufosse 1918：30-31］，ストゥン・トラエンの奥地では，やはり毎年，ビルマ人，シャム人，ラオ人が，北方から Moulapoumok（ヴォン・サイ），Darlac まで入りこんで象を買い付けていた［Monographie 1913：21-22］。

同じく19世紀後半，ポーサット Pursat の南，カルダモン山脈の「原住民 aborigênes」は，ペアル Pear＝Bar という呼称で知られていて，カンボジア王が彼らの中から1人の首長を任命し，毎年4000kg のカルダモンを貢納する責任を負わせていた。カルダモンのほかには，自給用の米と野菜がいくらか栽培されていた［Aymonier 1900：228-229］。ポーサットよりさらに南のトポーン Thpong 地方は，山と森に覆われた地方である。この地方も雌黄，シェラック，2種類のカルダモン（クラコー Krakor とクラヴァン Krevanh）を産したが，質はポーサットのものに比べて劣っていた。この地方のカルダモンは，カンボジアの宰相の取り分と決まっていた。トポーンには870人の登録民 inscrits がまばらに分散して存在したが，彼らは税を雌黄で支払っていた［Aymonier 1900：230］。ポーサット山地（カルダモン山脈）の南の支脈には，クラン・ソムラエ Krang Samre またはソムラエ Samre という名の小地方があった。こ

＊3　上流のパサックとウボン Oubon では，lat と呼ばれる6～7cm の小さな鮭の形をした銅が貨幣であり，24個で1ティカルに相当した。

の地方の一部には，ソムラエという「原住民」が住み，カンボジア王にわずかな貢物を送っていた。この地方の水，森，山は不衛生であるという風評があり，産物はトポーンのものとほとんど同じであった[Aymonier 1900 : 230]。

以上の記録を見る限り，カルダモン山脈中部，ポーサット川流域は，カンボジアの王権に従属していたとみてよいだろう。カンボジア王国の中核ネットワークとカルダモン山脈中部を結びつける窓口は，ポーサットから30km 程離れたリエチ Leach という集落であった。1922年1月に行われたポーサットの理事官 Résident の巡察記録[INDO-RSC-00388] に拠ると，ポーサットの中国人商人と高地の住民がリエチで出会い，カルダモンと中国人商人が売りつける雑多な商品の取引をする。この取引が行われる時期には，リエチに市場が出現した。理事官は中国人商人から高地の住民を保護する目的で，取引を監視するためにリエチを訪れたのであった。当時リエチには，高地に至る道に沿って，4軒の木造瓦葺の宿舎 Sala が並んでいた。

またポーサットの理事官は，1915年の初頭に2週間を費やして，ポーサットからタイ湾岸のコッ・コンまで，カルダモン山脈を横断巡察した。この時の報告書[INDO-RSC-00399] に拠れば，カルダモン山脈を横切ってトンレ・サープ湖とタイ湾を結ぶ交通路は存在せず，またその建設も困難であるという。現在の国道網でカンボジア南西部の山脈を貫通するのは，プノム・ペンとタイ湾の海港シハヌークヴィル Sihanoukville を結ぶ4号線のみである。カルダモン山脈はカンボジアのタイ湾側とトンレ・サープ側を分断している。コッ・コンは現在も，プノム・ペンを中心とする陸上交通路網からは孤立した地域であるといってよいだろう。

パイリンはカルダモン山脈の西端，現在のタイ―カンボジア国境近くに位置している。カルダモン山脈のこの地域は，トンレ・サープ側ではサンケー Sangke 川を介してバット・ドムボーンに，タイ湾側ではチャンタブリ Chanthaburi と連絡する。19世紀のバット・ドムボーン，チャンタブリは，シャムの勢力圏内にあった。1907年にバット・ドムボーンが仏領に編入されて以来，パイリンもプノム・ペンの政治圏内に入ったが，プノム・ペンが実際にパイリンを掌握できていた期間はさらに短いと考えてよいであろう。現在も陸路を介したタイ側との結びつきは強い。パイリンの町にはタイ語の看板が立ち並び，カンボジアの貨幣リエル riel よりもタイのバーツ bat の方が一般的である*4。

以上の点から鑑みて，ダンレーク山脈南麓―東北部山地およびカルダモン山脈西端地域を，「カンボジアの辺境」という視点でのみ捉えることは，過去を対象とする研究だけではなく，現在を対象とした調査・研究においても危険である。特にパイリンを理解するためには，「カンボジア史」とは別に，パイリンそれ自体の歴史を再構築し，その上で，パイリンが周辺の大勢力――シャムおよびカンボジアといかなる関係を築いてきたのかを解明することが不可

＊4　1998年9月に訪問。

欠であろう。

3．パイリンの興隆

チャンタブン（チャンタブリ）港の産物として宝石が記載されるようになるのは，19世紀初頭以降である。1822年にタイ湾を旅行したイギリスの使節クロファード Crawfurd は，チャンタブンの丘では，サファイア，オリエンタル・ルビー，オリエンタル・トパーズを産するが，シャムのルビーとサファイアは，アヴァ Ava（ビルマ）のものより質が劣ると記している［Crawfurd 1967：419］。1855年のチャンタブンのマーケットでは，中国人商人が良質のサファイアとガーネットを売っていた*5。当時，チャンタブンの宝石は，バンコク経由でジャワに輸出されていたが，需要の減少に比例するように採掘量も減っていたという［Abstract 1856：176］。

チャンタブンの背後にある宝石鉱脈が大規模に採掘されるようになるのは，1870年代以降のことである。以下のようなパイリンの鉱脈発見譚がある。鉱脈発見以前，パイリン地区は厚い森に覆われており，現地の住民たちが狩猟場にしていた。1872年頃，シャムに住み着いていたシャン Shan 人の何人かが，チャンタブン渓谷の Bo-Novong*6で発見されたルビー鉱山に来た。その採掘準備作業中に，ボー・ヤカー Boyakar 村北方のオー・トン O Toung の丘で新たなルビー鉱脈が発見され，シャン人とシャム人たちが採掘している最中であるという情報が入った。Maung Visa という人物が人々を率いてオー・トンの丘を目指した。

途中，Phya Kampout，Phakat，Mogok*7という場所を通過した。これは1875年のことであった。10日間かかって鬱蒼とした森を抜け，オー・トンに到着すると，現地人の子供たちがサファイアで遊んでいた。ここで現地人から，狩猟の途中に川床で大量のサファイアを発見したという情報を得ることができた。そこで，シャン人たちはこの地区を探索し，Vong-sang-Vong の村を訪れ，クロン・タ・ヴァオ Khlong-Tavao の村に住み着いた［Cheminais 1960：417-418/Filleau 1920：424/Pracum：70-71］。ここに現れる地名のうち，オー・トン，ボー・ヤカー，クロン・タ・ヴァオは，パイリン地区に現存する。

1877年にはタンソー Tongsou，Chang la Bok，ボー・ヤカーの鉱脈が発見され，同名の村が興り，ラオ人とシャン人が押しかけてきた。さらに，山中でもう一つの鉱脈が発見され，カルダモン園をつぶして採掘された。この鉱脈はボー・ハー・バート Bo Ha Bat（5ティカルの鉱山）と名づけられた。鉱山労働者1人当たり5ティカルの税が徴収されたことが，命名の由来であった［Filleau 1920：425］。

以上の鉱脈発見譚が最初に記述されたのは，1915～18年のフランス植民地当局によるパイリン調査の成果としてである。しか

＊5　この報告書では，カティー catty（600g）あたり5～10ティカルという価格が報告されている。
＊6　Bo-Novong 鉱山では，最初にシャム人が採掘を行い，次にシャン人たちが入ってきたという。また，原注によると，地誌編纂当時には，未だこの鉱山名が残っていた。
＊7　地誌編纂当時，すでに Mogok 村は消滅していた。

しながら，同時性という点でより信頼のおける資料である英国領事報告書によって，1870年代中葉に鉱脈発見があり，1879年にラッシュが発生したことが確認できる。

1879年の領事報告書によると［c-2571 1880：2-3］，5年程前に現地人の猟師が新しいサファイア鉱山を発見した。新鉱山は隔絶した場所にあったが，ビルマ人やインド人の宝石商や鉱山労働者たちの間に噂が広まり，何人かの鉱山労働者たちが実際に鉱山にたどりつき，ラングーンやカルカッタに宝石を持ち帰って莫大な収入を挙げたので，新鉱山へのラッシュが始まった。

1879年には，何千人もの「英国臣民」が，英領ビルマからバンコクを経由して鉱山に向かった。チャンタブン唯一の英国商社ボルネオ・カンパニー Borneo Company の蒸気船は，5～12月の間に，4912人の乗客をバンコクからチャンタブンまで運んだが，その大半がボルネオ・カンパニーの代理店からパスポートを与えられた「英国臣民」であった。武装した異邦人が大挙して現れたので，当初，チャンタブンとバット・ドムボーンの現地人は大いに警戒した*8。しかし，鉱山労働者たちは平和的に行動して信頼を回復し，現地の人々はむしろ，鉱山労働者たちに食糧品などを高く売りつけることによって利益を挙げるようになった。また，多数の鉱山労働者たちが「ジャングル熱」で死んだが，ペグー出身のトンスー Toung-thoos たちが，現地の気候に対して最も耐久力があることも判明した。

この領事報告書が作成された時には，経験豊富な宝石商が多数，鉱山近隣に住みついており，鉱山労働者たちは現地で，しかも適正な価格で宝石を売ることができた。しかし，ラッシュが始まった当初は，チャンタブンで宝石を売ることができなかった。領事報告書には，次のような事例が引かれている。

今バンコクにいるある男は，チャンタブンで宝石を1000ルピー rupee で売ろうとしたが，買い手が見つからなかった。ラングーンに行ったところ，1万5000ルピーという値がついた。しかし，彼は宝石の真価を知ってしまったので，カルカッタまで持って行って売ることにし，ついに3万ルピーを得た。

現金を手にした鉱山労働者たちは，シャム人の妻を娶るようになり，適齢期の姿形の美しい女性たちの価値が高くなっていた。また，鉱山労働者たちに最も人気がある食料品は，缶入りミルクとイギリス製のビスケットで，これらはチャンタブンの現地人の店に豊富に揃っていた。

この後，1881年には，「明確な法規の欠如ゆえに」数多くの紛争が起こったが，人々の間に秩序が戻ると，パイリン地区の発展が始まった。バンコクとカルカッタの市場が開き，銀行の仲介によってヨーロッパにも宝石が輸出されるようになり，パイリン地区には大量の銀が流通するようになった。1884年には，パイリン地区は暴風雨の被害を受けた。土砂崩れが起きてボー・

＊8　彼らは，シャムの宿敵であるビルマ人とペグー人による「再征服」を恐れたのであるという。

ヤカー川が氾濫し，多くの居住地が流され，大勢の人々が犠牲になったが，パイリンはすぐに復興し，以前にも増して発展した［Cheminais 1960：418/Filleau 1920：425-426/Pracum：66］。

『バット・ドムボーン地誌』によると，1880年代前半のパイリンに居た鉱山労働者の大半はクラ Koulahs と呼ばれるビルマ人とペグー人であり，その他に何人かの中国人商人もいた。鉱山労働者の人数は，約3000～4000人と推計されている。彼らの大半は家族を伴わない短期滞在者で，採掘地区全体の森の中に散在する小さな村々に住んでいた。この地誌の著者は，当時のパイリンは非常に非衛生的で，ヨーロッパ人には住めないであろうし，アジア人も大量に死亡してはいたが，一攫千金の夢のために，死亡数を上回る人数の鉱山労働者たちが流入してきていたと記している［Brien 1885-86：40-41］。1889年の英国理事報告書には，チャンタブン近郊の宝石鉱山中，パイリンが最も大規模で，4000～5000人の鉱山労働者を擁して賑わっていたと記されている*9［c-6205-2 1890：23］。

1907年に，パイリンはフランスの植民地支配下に入った。人頭税証明書によれば，この頃パイリン地区には，650～750人のビルマ人壮丁と，1000人程のラオ人，カンボジア人，中国人，シャム人がいた［INDO-RSC-00355］。1910年代後半には，パイリンの市街地には800軒の木造藁葺の家屋があり，6 km にわたって街路が発達していた［Filleau 1920：52］。『パイリン地誌』では，当時のパイリンの光景を，以下のように再現している［Filleau 1920：426-430］。

パイリンは高原の上に位置している。バット・ドムボーン方面からパイリンに入るとき，最初に目に入ってくるのは，ビルマ式の寺院であった*10。当時のパイリン地区は，Bodineo，Bo Pohir，Bo Laphok の3村からなっていた*11。

Bodineo は商業地区である。中国人，ときにビルマ人の経営する店舗が，シャムから来た珍しい商品を旅人に提供している。もっと南に行くと，町を見下ろす丘の麓に Bo Banya，Bo Nambar，Bo Khlong Khlang*12などの集落が生まれている。

北には Bo Pohir 地区があるが，Bodineo ほど賑やかではなく，住民たちは家庭的な平穏の中で生活しており，宝石商たちがサファイアを選り分け，加工している。この地区では，砂岩で舗装された道が枝分かれしながら高原の端まで伸び，ラオ人の村で終わっている。

西の Bo Laphok 地区では，バラを豊富に植えた瀟洒な庭に囲まれた家々が間隔をあけて点在し，見事な散歩道になっている。

＊9　パイリンの他には，次のような鉱山があった。チャンタブンの町から北西に3時間歩くと，Ban Kacha 鉱山があり，現地のシャム人と中国人が，質の劣るルビーを採掘していた。トンスーとビルマ人は，Ban Kacha では働いていなかった。チャンタブンから12時間の所にムアン・クルン Müang Krung 鉱山があり，100人ほどの鉱山人口があった。大半がトンスーで，少数のシャム人と中国人がいた。チャンタブンから2日の距離に位置するクラート Krat には，ルビーの出る鉱山があったが，サファイアはほとんど出なかった。クラートで働くトンスーは3000人ほどであった。

＊10　この寺院は現在も残っている。

『パイリン地誌』では，パイリン住民の一日の活動を，次のように表現している。

繁栄の年月の中で，パイリンの人々は多くの祭りを祝うようになり，夜更かしをするようになった。クラも朝寝坊である。日の光が十分に扉から差し込んでからでないと，起きようとはしない。そして，8時頃に朝食が済んでからでないと，働こうとはしない*13。

サファイアの仲買人は，9時にならないと家を出ない。いつも肌身離さずにいる頭陀袋を持って，主だった商人たちの家へ向かう。彼らは家で取引をするのだ。道中，彼はあちこちで立ち止まり，開いたばかりの花で小奇麗に飾った売り子たちが行き来する道を大いに楽しむ。彼女たちの商品は非常に軽く，その若い足取りに合わせて揺れている。売れ行きなどは少しも心配しない。パイリンで売り子をするのは，朝の散歩のためであって，生活のためではないのだ。

ブローカー Broker――これは自称である――は，バンコクやチャンタブンの商社の代理として働いている。彼は気長に客を待つ。ほら，売り手がティーポットと小さな茶碗の周りに集まってきた。やっと仕事が始まり，各自が商品を見せる。小さな天秤を使って宝石を綿密に計量し，それぞれがそれぞれのサファイアについて意見を言う。

ブローカーは平静に，取引状況が低調であることを説明し*14，安くサファイアを手に入れようとする。急ぐことはない。こ

＊11　Bodineo は，現在，パイリンの市街地内，パイリン地区に属するバディン・ニエウ Badin Niev であろう。Bo Pohir は同じくパイリン地区に属するパヒー Pahi である。Bo Laphok は未だ比定できていない。

『パイリン地誌』には，1913，14年の村落別ビルマ人，クラ人，カンボジア人，ラオ人人口が提示されている［Filleau 1920：45］。

村名	1913年	1914年
Bodineo	2,563	2,153
Chonglapok	1,512	967
Phahi	2,225	1,907
Channlapa/Channtapa	26	69
Boyakar	345	315
Kannophay	483	396
Botansou/Botangsou	332	289
Houikhem	214	194
Changlytwin	67	
Bosendeng		58
合計	7,767	6,348

＊12　未比定。

＊13　ただし，1915年第4四半期経済報告書［INDO-RSC-00355］には，次のような記述があり，注意が必要である。「地区全体で最も寒い地点は，異論の余地なくパイリンである。ここでは，朝の9時頃になって漸く太陽が姿を現すが，午後3時頃には姿を消してしまう。ほとんど備えのない住民たちは，寒さから身を守るために，家の中で暖房の火を焚いている。」

の時は折り合わなくても，売り手たちは彼が次にバンコクに行く前にまた戻ってくる。バンコクへの旅！　確かに経費はかかり，パイリンからチャンタブンに向かう道程は疲れるものだが，ブローカーはできるだけ長く，シャムの楽しい首都に滞在しようとする。

中国人の商人もまた，居心地よい店舗で待っている。店には，食料品が美しい布地*15の横に並べられている。客は必ず品定めにやってくるに違いない。お祭りが近いので，至るところが活気づいているからだ。ほら，美しい客がやってきた。彼女は見とれるような，なまめかしい姿勢で優雅に座り，シャムのサムポット sampot*16，絹のサロン，薄いモスリンを品定めする……。

真っ直ぐで，ぴったりと体に合ったサロンをはき，上半身にはゆったりした袖口のボレロをまとった上品なビルマ女性たちが，優美なしぐさで，彩色模様のある透き通った布のパラソルを持っている。彼女たちは小さなグループになって行き来する。彼女たちの髪型はちょっとした傑作で，華奢な印象を完璧なものにしている。髪の一部はうなじの上の方で二つの先端のある弧を描き，残りの髪は頭を取り巻いている。これは若い娘の髪型である。20歳くらいでは，髪型はより単純になり，単に頭を取り囲むだけである。

クラの女性たちは，花に特別の愛着を持っている。豊かな者も貧しい者も，バラ，冠に編んだジャスミン，チャンパ champa を常に髪に飾っている。このように飾りたてると，まるで小さな東洋人形のように見える。

男性はどちらかといえば大柄で，すらりとして，筋骨隆々としている。東洋風にターバンをつけ，意志の強そうな顔つきは高慢で厳しく，物事に動じないようにも見える。胸と腿は呪いを除け，不死身になるための，青と赤の刺青で覆われている。

正午に賭場が開かれる。正午の賭博には常連だけが参加するが，夕方の賭博には，より多くの人々が集まってくる。

午後4時に家族一緒に夕食をとり，その後でそれぞれが楽しい晩を過ごす準備をする。

それは宗教的な儀式のこともある。……楽団が行列の先頭に立ち，男性が続く。そして，行列の最も輝かしい部分，すなわち女性たちと若い娘が次々と，花を中心とするさまざまな供物の盆を持って行く。行列が進むありさまは，まるで絵巻物のようである。寺院につくと，祈りを捧げ，供物を祭壇の足元に置いて，行きと同じ順序の行列になって戻ってくる。

晩にはまた，シャムの劇に人々が集まってくる*17。見世物はたいてい野外で，時

＊14　『パイリン地誌』によると，調査時には，ヨーロッパの紛争（第一次世界大戦）のため，宝石市場は低調であった［Filleau 1920：28］。

＊15　『パイリン地誌』によると，当時パイリンは，シャム製のサムポット，イギリス，アメリカ，日本製の綿布など，シャムから大量の布を輸入していた［Filleau 1920：51］。

＊16　巻スカート。

＊17　『パイリン地誌』によると，パイリンには，ビルマ人の踊り子はいなかった。クラ人はシャムの音楽と劇を非常に好み，祭りのときには必ず，バンコクやチャンタブンの一座がパイリンを訪れた［Filleau 1920：445］。

に倉庫の下で繰り広げられる。やがて，その場に置かれたテーブルについて，練乳を混ぜた不味いコーヒーと，Huntley Palmers のビスケットを口にする。しかし，これらはお喋りのきっかけにすぎない。売り子は次から次へと友人を呼び，売り物を無料で注いでやる。

真夜中，それが家路につく時間である。美しい月明かりの下を，遊び疲れた人々は静かに群れをなし，楽しい夕べを思い出しながら，そして早くも明日の喜びに思いをはせつつ，休息を求めて家に向かう。

独立後，1960年に出版された地誌『カンボジア Le Cambodge』によると，この後，鉱山都市パイリンの繁栄は1940年代まで続いた［Cheminais 1960：416-418］。

この町の第一印象は戦場である。家々はほとんど全部が閉じられていた。家のそばの空地，庭には，ジグザグに溝が走っていた。道にはほとんど誰もいなかった。商店は無人で，全く人は集まっていなかった。村中が宝石掘りに熱中しているからである。男も女も子供も夜明けに家を出る。つるはしを肩に，ふるいを手にして，弁当を竹籠に入れ，一日中腰まで水につかり，赤土を洗う。目はじょうごにくぎ付けで，宝があるほんのわずかな兆候も見逃すまいとしている。美しい宝石を見つけるために，赤土の他に砂利を洗い，屑まで洗い，何でも洗う。当然大量の水が必要になるが，現場には全く水がないので，請負業者が１日の収穫の25％で水を提供する。さほど価値のない，小さな粒しか採れないことがしばしばあるのだが。

何軒かの店の奥の部屋には，ブローカー broker がいる。彼は売り手を迎え，宝石を見積もり，鑑定し，代金を支払う。一方，彼のアトリエには子供か若い娘の使用人が何人かおり，ペダルで回す円盤の前に座り，砥石に押し付けて宝石を研磨し，ファセットに加工している。商品が十分に揃ったら，彼が町まで売りに行ったり，仲買人がやってきて買い付けたりするのである。

初期の賊の被害，1884年の恐ろしいサイクロンにも関わらず，賭博場の設立とラッシュのために，パイリンは1940年まで繁栄した。その頃，治安の悪化によって，多くの住民が村を捨て，ある者は北ラオスに，ある者はストゥン・トラエン地方のボー・カエウ Bokéo に移住した。平和が戻ると，新たな発見を期待してパイリンに戻った家族もあった。しかし不調が続いたために，1940年にはすでに多くのビルマ人が荷物をまとめて高原から退去していた。

以上，資料に現れるパイリンの描写を時系列に沿って整理してみた。本稿で使用した資料は，外部から描いた一方的なパイリン像であり，かつ資料自体が断片的で，相互比較による検討を許さない。しかしながら，各資料に共通し，かなり蓋然性が高いと考えられるのは，以下の点である。

パイリンが興隆したのは，1870年代中葉以降のことである。特に1879年は，それまでにない大規模なラッシュが発生した年として，重要な画期である。パイリンの先住民に関する情報は，ほとんど残っていない。ラッシュ後のパイリン人口で最も活動的だったのは，チャンタブンを入り口として，この世界に流入してきた鉱山労働者たちで

ある。しかしパイリン地区の先住民については，狩猟を生業の一つとし，鉱山労働者たちに鉱脈の場所を教えたという以上のことが判明しない。宝石ラッシュの中で彼らがどうなっていったのかは，現在存在が知られている資料からは分かりえない。

パイリンの描写を時系列に沿って並べることによって，1880年代のパイリンは，熱病が猖獗を極め，男性の鉱山労働者が一攫千金を狙って短期滞在するだけの鉱山地区であったのに，1910年代中葉までに，華やかなビルマあるいはクラ女性たちの姿が目立ち，ビルマ式の寺院が建ち，恒久的な家屋や店舗が並ぶ，一つの町に発展していったという経過を読み取ることができる。フランス人が描いた20世紀初頭のパイリンの町は，豊かで享楽的，あるいは刹那的な，一種のエルドラドである。

4．交易ネットワークとパイリン

カルダモン山脈の西端に位置するパイリン鉱山地区にとって，外界との接点は，トンレ・サープ湖西端のバット・ドムボーンとタイ湾岸のチャンタブンの2ヵ所である。パイリンは両地点のほぼ中間，象で3日の行程*18に位置している［Boulangier 1887：291/5：23/Brien 1885－86：10/Filleau 1920：53］。1915年以前には，チャンタブン ルートがパイリンと外界を結ぶ唯一の経済路で，バット・ドムボーン ルートは，行政上の連絡に用いられるだけであったという［Filleau 1920：50］。

チャンタブン港はバンコクと連絡する。1855年のシャム貿易に関する報告書によると，当時，チャンタブンはタイ湾東岸地域の2大港の一つであったが*19，布類，アヘンを主とする外国産品は，すべてバンコクからチャンタブンに供給されていた。チャンタブンからの輸出品は，胡椒，砂糖，沈香，建築用材木，カルダモン，スティックラック，皮革，角，魚，タバコ，雌黄，象牙，犀角，木油，コーヒーであったが，バンコクが唯一の輸出先で，80～150トンの小さなジャンク船が輸送に使われていた。チャンタブンでの取引は，物々交換ではなく，すべて現金で行われていたが，チャンタブンで流通する唯一の貨幣はシャムのティカルで，ドルは全く使えなかった*20。1851年に英国のブリグ船 Pantaloon 号がチャンタブンを訪れたときには，バンコク

＊18　パイリン―チャンタブン ルートの行程は，次のようになる［Filleau 1920：53］。

1日目午前	パイリン→Pakat	4時間24km	季節によって道が凸凹になる
午後	Pakat→Phya Kampout	2時間半15km	
2日目午前	Phya Kampout→sala Hinlat	3時間半18km	山道
午後	sala Hinlat→Wat Pong	1時間6km	
3日目午前	Wat Pong→Makham Makham→チャンタブン	2時間半15km 2時間15km	平地

＊19　もう一つはカンボジアのコムポート Kampot。

＊20　その他に，一人の中国人商人が，太守から権利を買収して製造し，流通させている現地通貨があった。それは平たく丸い粗雑なガラスの塊で，漢字が刻印されていた。金銭と同じように使われ，発行者の店で銀と交換することができた。

が唯一の開港場であるという理由で商取引を断られた。1856年に英国船 Speed 号*21が訪れたときには，イギリスとシャムの間に修好通商条約（バウリング Bowring 条約）が結ばれた後であったので，問題なく交易を行うことができた［Abstract 1856：174-176］。宝石ラッシュの発生した1879年には，英国商社ボルネオ・カンパニーが，バンコクとチャンタブンを結ぶ蒸気船定期便を就航させた［c-2571 1880：2］。1889年には3隻の小型蒸気船が，バンコク―チャンタブン間を定期的に航行していた［c-6205-2 1890：22］。

すでに見たように，鉱山労働者たちは主にチャンタブン経由で，英領ビルマからパイリンに流入してきた。またラッシュが起こった当初は，採掘者自身がラングーン，カルカッタまで宝石を運んで売却していたが，その年のうちに宝石商が鉱山近郊に住みついて，現地で宝石の取引が行えるようになった。1880年代には，大半の宝石が原石のまま，チャンタブンで，トルコかインドの宝石商人に売却された。残りもほとんどが，バンコクかインドまで輸送して売却された*22。例外的に，現場でカット・研磨して金の指輪に嵌め込まれたり*23，バット・ドムボーン*24あるいはプノム・ペンに輸送されることもあった［Brien 1885-86：11-12］

20世紀初頭でも，この状況は変わらない。『パイリン地誌』によると，食糧の輸入，サファイアの輸出には，チャンタブン ルートが使われていた。パイリンでは食料品・衣料品などの物資をシャムに依存していたため，平時でも物価が非常に高かったが，雨季には道程が困難になり，チャンタブンからの物資の到着が不定期になって，より一層物価が高騰した［Filleau 1920：50-52］。

第一次世界大戦中には，パイリンの宝石産業は著しい衰退を見せた。1914年の報告［INDO-RSC-00355］によると，ビルマ人たちは海路が危険であるために，宝石をカルカッタに輸送することをやめた。その結果，採掘に雇われているクーリーたちの賃金が下がり，クーリーたちの中にはより報酬の良い仕事を求めて，鉱山地区を放棄する者も現れた。1916年第2四半期経済報告

＊21　lorcha（西洋式船体の中国船）。

＊22　1889年の英国領事報告書にも，鉱山労働者たちが，自らラングーンかカルカッタまで宝石を輸送し，売却していたことが記されている［c-6205-2 1890：23］。

＊23　『バット・ドムボーン地誌』には，「ビルマ人の研磨法」が記されている。「原石を棒の端に gomme-laque で取り付け，サファイアの粉末の上で，磨り減って丸くなるまでこすりつけ，赤銅の上に広げた籾灰で，最終的な研磨を行う。たいていは，一方が平らで他方が凸状の卵形か楕円の，天道虫に似たカボションにする。時にファセットにすることもあるが，ひどくゆがんでいて，石を大変に醜くしてしまうことが多い。指輪によっては，5，7，9個のカボションが，最も大きなものが中央に来るように，指輪の周りの爪に並んでセットされている。時に，ルビーとサファイアが交互になっていることもある。このような指輪は，シャム人とカンボジア人にひどく人気がある。ルビーの色が薄すぎる場合，宝石商は，爪の底に赤い色調の蠟を敷いて，もっと高い値のつく色にしようとする。サファイアも，赤い蠟の代わりに黒ずんだ青い蠟を敷く。この手法は極めて一般的に用いられるので，手管を暴くためには，石を持ち上げねばならない。」

＊24　1880年代前半にバット・ドムボーンを訪れたパヴィー Pavie は，パイリン鉱山の「ビルマ人」たちが，生活必需品を仕入れたり，あるいは保養のために，バット・ドムボーンを訪れているのを目撃している［Pavie 1884：110］。

書［INDO-RSC-00355］にも，「産業はヨーロッパの出来事の影響を大いに被っている。特にパイリンでは，ビルマ人たちは宝石の販路をバンコクにも，ラングーンにもカルカッタにも見つけられないので，採掘を鈍らせている。彼らは，この状態が終わり，彼らの地区にかつてのゆとりと繁栄が戻ってくるのを辛抱強く待っている」という記述がある。この時代，宝石の主な市場はヨーロッパにあり，パイリンの景況はヨーロッパの状況に直結していたことが分かる。

少なくとも仏領化以前のパイリンは，チャンタブンを介してシャムと結びつく物流のネットワークの中にあり，宝石という産物および鉱山労働者を通じて，英領インドと連続していた。1910年代後半からパイリン支配に乗り出したフランスは，パイリン—バット・ドムボーン ルートの建設［Filleau 1920：53］とともに，宝石以外のパイリン開発の可能性を模索する。『パイリン地誌』では，牧畜，カルダモンと籐，材木，香木等の森林資源，採石場，野菜・果樹の栽培，サトウキビ，トウモロコシ，カポック，ゴム，ココナッツ・オイルの生産，レンガ・瓦の生産の可能性を挙げている［Filleau 1920：46-50］。しかしながら，独立後に出版された『カンボジア』には以下のような一文があり［Cheminais 1960：418］，宝石に拠らないパイリン開発は実現しなかったと見るべきであろう。

現在では，鉱脈が枯渇しているのはほとんど確かだが，数年前から，パイリンは別な風に開発可能であると分かった。ゴム園や果樹園を作ることによって，カンボジアは，ここに新たな活動の場と利益の源を見つけることができるであろう。これらは，生産の大半が管理できないサファイアやルビーよりも，カンボジア経済にとって利益になると期待できる。

5．「国家の中にある国家」パイリン

1907年にバット・ドムボーン地方の一部としてパイリンを併合したフランス植民地権力は，当時のパイリンの状況を以下のように記している［INDO-RSC-00355］。

事実，それまで無人地帯であったパイリンの鉱山で，50年以上にわたって採掘を行ってきたのはビルマ人たちであった。ビルマ人たちはパイリンに一種の封土を確立した。その絶対的支配者は，常に彼ら自身によって選ばれたビルマ人の長であった。彼はビルマ人に対してのみではなく，クバル・ストゥーン Kbal-Stung を含む鉱山地区全体の住民に対して権力を行使した。

シャムの太守は常にパイリンには無関心で，Phya Kathathorn*25も彼の支配力をこの地域に伸ばすための努力をまったく行わなかった。もっとも住民の大部分は彼の統治の外にあった。ビルマ人たちは英国臣民であり，治外法権によって，バンコクの英国公使とチャンタブンの英国副領事に直属していたためである。

すなわち，パイリンの住民の大部分がビ

＊25　前バット・ドムボーン太守。

ルマに由来する英国臣民であり，彼らはすでに自立的な勢力圏を形成していた。そのため，フランス植民地当局はパイリンの処置に非常に慎重にならざるを得なかった。

この資料では，パイリンの住民を「ビルマ人」としているが，すでに第3章で見てきた通り，彼らは資料によって，ビルマ人，ペグー人，シャン人あるいはクラ，トンスーなどと記されている。彼らはすでにラーマ Rama III世期（1824～51年）には北タイ地域で交易活動を行っており，ラーマIV世期（1851～68年）には東北タイに活動を拡大した。1856年4月5日にシャムと英国の間でバウリング条約が批准されると，英国臣民である彼らの商業活動は飛躍的に活性化した［Koizumi 1990］。19世紀後半のパイリンの興隆も，この流れの中に位置づけられるべき事件であろう。

パイリンの「ビルマ人」たちは，英国臣民であることを盾にとって，現地勢力の干渉を免れようとした。1880年代中葉の状況を記した『バット・ドムボーン地誌』にも，次のような記述がある［Brien 1885-86: 12］。

鉱山労働者たちはそれぞれ銃を持っていたが，自衛のためというより，攻撃のための武器であるようであった*26。……英国臣民であることが，彼らを大胆にしていた。そもそも彼らは，「ファラン Farang（シャム語でヨーロッパ人を指す呼称）」には，3民族あると言っていた。イギリス人，フランス人と彼ら自身である。そして，バンコクかラングーンのイギリス当局が与えたカードを示すことによって，このことを断固として証明できると信じているのであった。

一方パイリンという場所自体は，シャムの政治圏の中に位置するものと認識されていた。

『パイリン地誌』によると，1877年にシャン人たちの副首長がバンコクに行き，英国領事によって宮廷に紹介され，鉱山の徴税人兼ビルマ人の長に任命された［Filleau 1920: 425］。1886年にもシャン人の長がバンコク宮廷に呼び出され，Luong Mani Yut Thana のタイトルと勲章を与えられた［Filleau 1920: 426］。

バンコクの宮廷が「ビルマ人の長」に課した最大の任務は，鉱山労働者から入山に当たって税を徴収することであった。1879年の英国領事報告書によると，地方の太守は Kam Sai という名の英国臣民を長に任命し，鉱山で働くすべての人間から2と1/4ティカルを徴収した。シャム側ではこれ以上の税は徴収せず，宝石の処分は鉱山労働者の自由に任されていた。この領事報告書では，宝石は隠匿が容易なので，今後，シャム側が従価税を導入しようとしても非

*26　パヴィーは，パイリンからバット・ドムボーンにやってくるクラのキャラバンの様子を，次のように描写している［Pavie 1884: 110］。「50～60頭の牛が，一列になって歩いている。それぞれが，1ピクル picul（約60kg）の米か魚を入れることができる，円筒形の籐の籠を二つ荷鞍に付けている。牛たちを率いる人々も，天秤棒に振り分けにした荷物を担いでいる。行列の前後両脇には，長，若者，老人たちがいて，剣や，それと同じくらいお粗末なピストルや銃で武装して，行列を導き，守っている。」

常な困難が予測されるとしている［c-2571 1880：3］。

1880年代前半のパイリンは，既に「国家の中にある国家 un état dans l'État」のようなものを形成していた。シャム王はパイリンの労働者1人当たり2ティカルの税を課していたが，現地の徴税頭は1人当たり3ティカルを徴収して，鉱山労働者1人につき1ティカルを自分の取り分にしていた。バンコク側は労働者数の厳密な管理を行わなかったが，それでも年間4,000ティカルがシャム王のもとに払い込まれていたという［Brien 1885-86：40-41］。

1889年にシャム政府は，イタリア人投機家にパイリン鉱山の採掘権を，中国系英国臣民とイギリス人にムアン・クルンとクラートの鉱山採掘権を与えた。これらの鉱山で採掘するためには，鉱山地区に入るときに，長に3ティカルを支払えばよかった。長はビルマ系英国臣民であった。鉱山労働者たちは2～3人のグループで働き，自分たちで宝石をラングーンかカルカッタまで運んで売っていた［c-6205-2 1890：22-23］。1898年には，Siam Company Limited の関連会社である Siam Exploring Company Limited が，パイリン鉱山を管理していた。鉱山で働くのはシャン人とラオ人で，自分で宝石を処分することが許されていた［c-9496-24 1899：14］。

パイリンがフランス保護領下に入った1907年当時，英国の会社 The Siam Syndicate Limited がパイリン鉱山の採掘権を独占し，その利権はさらに，Maung Soy という名のビルマ人に転貸されていた。鉱山労働者たちは独身者3ティカル（1$80），家族者5ティカル（3$00）の採掘許可料を支払わなければならなかったが，採掘した宝石については何の税も徴収されなかった。この採掘許可料は，サファイアの仲買人たちにも課せられていた。新しく流入してきたアジア系外国人，中国人，インド人，アフガン人の商人，布の輸入商も，彼らの職業が鉱山とは全く関係ないにも関わらず，例外とはされなかった。唯一，徴税頭（Maung Soy）の温情によってのみ，税を免除されることがありえた［Filleau 1920：37］。

すなわち，ラッシュの発生以来フランスの支配下に入るまで，「ビルマ人の長」が鉱山労働者1人当たり3ティカルを徴収し，宝石は鉱山労働者が自由に処分できるというシステムに変化はなかった。

パイリンの地は，宝石ラッシュ以前は森，あるいは無人地帯であったと記されている。外界の関心をほとんど引くことがなく，権力の空白地帯として取り残されていたのであろう。そこに大量の異邦人が流入して，周囲とは異質な人口集中地が発生した。既存の諸勢力の積極的な介入を拒む僻遠の地であったことに加え，新来者たちの英国臣民という立場を利用して，30年程の間に鉱山地区パイリンという特異な地域政体が成立しようとしていた。

フランスが対峙することになった「ビルマ人の長」Maung Soy は，パイリンにおける擬似王権的な存在であった。彼は上ビルマの出身で，30年近くパイリンに住み，パイリンのビルマ人たちからは，パイリンへの移住を統率した人物の後継者であると考えられていた。この頃には，バンコクの宮廷からルオン・モニー・ユッテァニエ Hluong Moni Yuttheanea/Luong Mani

Yut Thana の地位を与えられたモン・クンティー Mong Khunti/Maung Khunti という人物が，半ば伝説上のパイリンの始祖として語られるようになっていた。『パイリン地誌』によると，Maung Khunti は上ビルマ出身のシャン人であり，パイリン地区を狩猟場にして，森の精霊たちから恐れられていた［Filleau 1920：425］。この物語は，独立後に編纂された『民話集成』にも採録されている*27。『民話集成』によれば，モン・クンティーは鉱脈を発見したコラー Kola（クラ）人たちの長であり，パイリン地区に数多くの寺院を建てた人物でもあった［Pracum：66-67］。Maung Soy はバット・ドムボーンでこそ外国人集団の長に過ぎなかったものの，パイリンでは絶対的な支配者であり，祭りには彼の出席が不可欠であったし，彼の住居では配下に対する謁見が行われていた［Filleau 1920：27-30］。

フランス植民地当局は，Mang-Sai（Maung Soy）の権限を，パイリン地区のビルマ人に対するものだけに限定しようとした。しかし，彼はこれを拒み，パイリンにカンボジア人知事セン Seng が赴任すると，管轄権をめぐる紛争が発生した。

1909年2～3月のバット・ドムボーン理事官府報告書［INDO-RSC-00355］によると，「ビルマ人の長」は2月2日の手紙で，彼が通行証を交付した Kok-Khan 出身のカンボジア人22人の帰郷を，知事が不当にも妨害したと抗議してきた。バット・ドムボーンの理事官は，2月15日の手紙で，カンボジア人に対する通行証はカンボジア人当局のみが交付できることを説明した。2月21日に，「ビルマ人の長」は自分の誤りを謝罪してきたが，「今まで鉱山労働者たちは Mang-Sai だけに従ってきたので，カンボジア人知事が不満を抱くことになるのではないかと心配している」と，この手紙を締めくくっている。

バット・ドムボーンの理事官は，深刻な争いは避けるよう，パイリン知事に指示してあった。知事はトヴィエ・アムプル Tvéa-Ampil の軍事拠点の長である中尉 Lieutenant に仲介を依頼して，Mang-Sai と会見するために自ら Bo-Di-Nheo に赴いた。Mang-Sai はすぐさま自分の過ちを認めたが，自らの善意を述べ立て，事件はもう終わったことであるとも主張した。

この事件と同時に Mang-Sai は，通常よりも1ヵ月早く例年の祭りを始めるよう，鉱山地区の住民に命じていた。これを報告した中尉によれば，Mang-Sai の目的は賭博税と阿片税の増収であった。理事官は Mang-Sai に宛てた2月24日の手紙で，祭りに関する説明を求め，騒動を引き起こしかねないことを指摘し，格別の監督を要請

*27　パイリンの人々は，シャムの国に宝石を売りに行き，金に余裕ができると，短銃や長銃を買って，自分たちの財産を守っていた。退屈すると，彼らは森で獣を撃って遊んだので，森の精霊やネアク・ター Neak Ta は驚き怯えた。ある日，最も威力のあるネアク・ターが化身して，ター・ヤート Ta Yat とイェイ・ヤート Yeay Yat の夫婦に会いに来た。「精霊やネアク・ターたちが恐れおののいて，子孫たちを放り出して逃げ惑っているので，狩りは止めよ。そうしたら，我々はお前が高価な宝石を発見できるようにして，皆を金持ちにしてやろう。ただし，お前たちが金持ちになったら，山の上に寺を建てなくてはならない。それだけでなく，「孔雀踊り」を仏日 thngai sel ごとに演じなくてはならない。」こう言いおいて，ネアク・ターは姿を消した［Pracum：68-69］。

している。

今まで見てきた資料に描かれる，パイリンの「ビルマ人」たちの最も目立つ特徴は，銃で武装していたことであろう。1909年1月末にMang-Saiが提出した調査結果によると，鉱山地区内にある銃器の数は374丁で，その中にはMang-Sai自身が所有する46丁のカービン銃も含まれていた*28。理事官は，鉱山地区に存在する銃器の実数はこれをはるかに上回ると考えられることを認めつつ，これ以後の武器携帯許可数はこれを上限とすることになるだろうとしている。

バット・ドムボーンの理事官は，パイリ

＊28　詳細は以下の通り。

村名	銃器の数	詳細
Bo-Di-Nheo	103	通常のカービン銃29丁，5連発のカービン銃1丁，5連発銃4丁，紙火薬の銃 fusil a capsules 13丁，16連発銃2丁，12連発銃5丁，6連発銃1丁，4連発銃1丁，燧発銃1丁。ビルマ人の長の銃46丁の内訳は，Kak-Khangというカービン銃10丁，5連発のカービン銃5丁，短いカービン銃6丁，Louk-Lek-Sanというカービン銃8丁，12連発のカービン銃8丁，Yay-Tutというカービン銃3丁，紙火薬の銃6丁。
Bo-Tong-Sou	19	通常のカービン銃7丁，紙火薬の銃11丁，燧発銃1丁。
Tv ēa-Ampil	21	紙火薬の銃11丁，燧発銃10丁。
Bo-San-Dong	7	カンボジア人だけの村。 通常のカービン銃1丁，12連発銃1丁，紙火薬の銃1丁。
Bo-Hoi-Kmen	12	通常のカービン銃2丁，6連発銃1丁，紙火薬の銃1丁。
Bo-Ban-Hai	14	通常のカービン銃5丁，16連発のカービン銃1丁，5連発のカービン銃1丁，紙火薬の銃5丁，マスケット銃1丁，燧発銃1丁。
Tavao	28	12連発のカービン銃1丁，紙火薬の銃24丁，燧発銃3丁。
Bo-Yaka	25	12連発のカービン銃1丁，8連発のカービン銃1丁，6連発のカービン銃1丁，通常のカービン銃1丁，紙火薬のカービン銃13丁，12連発銃4丁，6連発銃2丁，燧発銃2丁。
Khouk-Tapeng	15	カンボジア人だけの村。 紙火薬の銃10丁，通常のカービン銃5丁。
Bo-Pakhi	22	通常のカービン銃10丁，紙火薬の銃10丁，12連発銃1丁，6連発銃1丁。
Kha-No-Phai	6	12連発銃1丁，紙火薬の銃5丁。
Chhra	19	カンボジア人だけの村。 紙火薬の銃18丁，燧発銃1丁。
Bo-Spouk	8	紙火薬の銃1丁，燧発銃7丁。
Kbal-Stung	14	通常のカービン銃5丁，紙火薬のカービン銃7丁，12連発銃1丁，5連発銃1丁。
Bo-Phloi-Deng-Noi	9	16連発のカービン銃1丁，5連発のカービン銃1丁，通常のカービン銃5丁，紙火薬の銃2丁。
Pram-Dim	7	紙火薬の銃2丁，燧発銃5丁。
Bo-Hipoun	23	紙火薬の銃19丁，通常のカービン銃4丁。
Bo-Loy-Khio	32	紙火薬の銃21丁，燧発銃1丁。

ンが，シャム，ラオス，バット・ドムボーンからポーサットにかけて，広範囲に活動していた盗賊たちの巣窟でもあると見なしていた。

……私の官吏たちからの報告はすべて，盗賊の中に必ずビルマ人がいることを記している。特にヴィセス・ヌー Visés-Nhou の一味は，Thimonnier 中尉が戦死するに至った我が部隊との戦闘では，30人のビルマ人を擁していた。

盗賊どもは鉱山地区に安全な隠れ家を見つけ，パイリンはその巣窟となった。悪人どもの往来は，パイリンにとって幸運な財源をもたらした。実際，彼らはここで武器，弾薬，阿片，酒，食糧や衣服を手に入れていた。そして，彼らが強奪してきた銀をたっぷり落としていくのであった。

フランスは防御のためにトレン Treng とトヴィエ・アムプルに軍事拠点を設置したが，十分な成果は得られていなかった。

1910年７月25日に書かれた年報［INDO-RSC-00355］によると，Mang-Say（Maung Soy）はバット・ドムボーンの理事官に宛てた手紙の中で，シャム時代の Siam Syndicate Limited は，「やりたいようにやらせてくれていたものだ」と懐かしんでみせている。理事官は良い解決法が見当たらないこと，Mang-Say にフランスの支配を脱する意志がないことを理由に，鉱山地区には最大限の自治を認めようとしていた。そのため，知事の居所はパイリン地区内ではなく，近隣のクドル Kdol が割り振られた。フランスがパイリンの実効支配に乗り出すのは，1910年代後半以降のこととなる。

まとめ

本稿では，パイリンの興隆からフランス植民地に組み込まれるまでの時期を扱った。

第一に問題となるのは，パイリンの興隆という事件そのものである。パイリンは1879年の宝石ラッシュによって興隆した。興隆の担い手はビルマ方面から流入してきた英国臣民の鉱山労働者たちであった。それだけではなく，唯一の産物である宝石の市場は，当時，西方のインド，ヨーロッパが中心であった。イギリスを中心とする国際交易ネットワークが世界的に拡大し，それまではタイ湾交易圏の一港に過ぎなかったチャンタブンを巻き込んで初めて，パイリンが興隆するための条件が整ったということができる。

第二に，興隆期のパイリンは，シャムの政治圏内に位置する自立的な地方政体の一つとして成長しつつあった。パイリンの住民の大半は，新しく流入した英国臣民であり，シャムの王権は，「ビルマ人の長」にタイトルを与え，鉱山労働者１人当たり一定額の税を徴収させるという以上の介入をしなかった。何よりもパイリンの価値そのものである宝石は，遠方にある勢力中心からは掌握しがたい品物である。唯一，パイリンの宝石をいくらかでも管理しうる地点があったとすれば，積み出し港であるチャンタブンのみであろう。バンコクは当初から宝石の管理を全く放棄しており，1889年になると，英国の会社に採掘権を与えてしまっている。

パイリンは宝石が国際商品化したゆえに興隆し，近隣の政治勢力や内陸の経済圏とは独自に，国際的な交易網に直結する地域

政体として成長しようとしていた。しかし，パイリンの興隆期は，シャムと仏領インドシナの領域が成立していく時期でもあった。両者の交渉の結果，パイリンは1907年に仏領インドシナに組み込まれた。そのため，現在のパイリンはカンボジア領となっている。フランス植民地当局はパイリンの自立性を殺ぎ，実効支配を及ぼそうとした。しかしながら，現在のパイリンのプノム・ペンに対する自立性を見る限り，フランス植民地当局そして独立カンボジアの試みは，徹底しなかったと考えられる。宝石のくにパイリンの脆さは，むしろ，宝石という唯一の資源に依存し，人口の大半が鉱山労働者という流動的なものから成り立っていたことであろう。彼らは周辺からは孤立し，武装を常としていた。治安があまりにも悪化したり，戦争などによって宝石産業が停滞したり，鉱脈に枯渇の兆しが見えたとき，パイリン地区を放棄する者が現れる。

パイリン史研究の次なる課題は，仏領期から独立カンボジア王国にかけての時期である。この時期に，パイリンをプノム・ペンに結びつけるための最初の試みがなされた。それはどのような手段によるものであり，どのような展開をたどることになるのであろうか。

参考文献

" *Abstract of Reports on the Trade of Various Countries and Places, for the Year 1855, Received by the Board of Trade (Through the Foreign Office and the Colonial Office) from Her Majesty's Ministers, Consuls, and Colonial Authorities.*" 1856. BPP (JCAS)

天川直子編
2001 『カンボジアの復興・開発』IDE-JETRO 研究双書 No. 618　アジア経済研究所。

Aymonier, Etienne.
1900. *Le Cambodge.* Vol. 1. Paris.

Boulangier, Edgar.
1887. *Un hiver au Cambodge.* Tours.

Brien.
1885-86. " Aperçu sur la province de Battambang." Excursion et reconnaissance. 10-11.

c-2571. 1880. " Siam. No. 2 (1880). Commercial Report by the Acting British Consul-General in Siam for the Year 1879." BPP (JCAS)

c-5618-148. 1889. " Foreign Office. 1889. Annual Series. No. 595. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1888 on the Trade of Bangkok." BPP (JCAS)

c-6205-2. 1890. " Foreign Office. 1890. Annual Series. No. 771. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1889 on the Trade of Bangkok." BPP (JCAS)

c-6550. 1891. " Foreign Office. 1891. Annual Series. No. 938. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1890 on the Trade, & c., of Siam." BPP (JCAS)

c-7919-21. 1895. " Foreign Office. 1895. Annual Series. No. 1653. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1894 on the Trade of Siam." BPP (JCAS)

c-8277-5. 1896. " Foreign Office. 1896. Annual Series. No. 1787. Diplomatic and Consular Reports on Trade and Finance. Siam. Report for the Year 1895 on the Trade of the Bangkok Consular District." BPP (JCAS)

c-9496-24. 1899. " No. 2353 Annual Series. Diplomatic and Consular Reports. Siam. Report for the Year 1898 on the Trade of the Consular District of Bangkok." BPP (JCAS)
Cd. 352-24. 1900. " No. 2528 Annual Series. Diplomatic and Consular Reports. Siam. Report for the Year 1899 on the Trade of the Consular District of Bangkok." BPP (JCAS)
Cd. 2236-30. 1904. " No. 3286 Annual Series. Diplomatic and Consular Reports. Siam. Report for the Year 1903 on the Trade of Bangkok." BPP (JCAS)
Cheminais, L.
1960. *Le Cambodge.* Saigon.
Crawfurd, John.
1967. *Journal of an Embassy to the Courts of Siam and Cochin China.* Kuala Lumpur.
Dufosse.
1918. *Monographie de la circonscription résidentielle de Kompong-Thom.* Saigon.
Filleau-de-Saint-Hilaire Gilbert
1920. " Le district minier de Phailin (Battambang-Cambodge) et l'exploitation de ses gisement de saphir 1915 à 1918." *Revue Indo-Chinoise.*
Forest, Alain.
1980. *Le Cambodge et la colonisation française. Histoire d'une colonisation sans heurts (1897-1920).* Paris.
Garnier, Francis.
1873. *Voyage d'exploration en Indo-Chine effectué pendant les Années 1866, 1867 et 1868 par une commission française présidée par M. le captaine de frégate Doudart de Lagrée.* Paris. Librairie Hachette.
INDO-RSC-00355. 1907-1916. Rapports périodiques, économiques et politiques de la résidence de Battambang. (C. A. O. M./Aix-en-Provence)
INDO-RSC-00388. 1915, 1922. Tournée de résident de Pursat. (C.A.O.M./Aix-en-Provence)
INDO-RSC-00399. 1915. Rapport de tournée de résident aux monts des cardamones de l'est et au golfe du Siam. (C. A. O. M./Aix-en-Provence)
北川 香子
2001 「ポスト・アンコール」桜井由躬雄編『東南アジア近世国家群の展開』岩波講座東南アジア史第4巻 岩波書店。
Koizumi Junko.
1990. " Why the Kula Wept : A Report on the Trade Activities of the Kula in Isan at the End of the 19th Century." *Southeast Asian Studies. 28-2.*
Monographie de la province de Stung-Treng. 1913. Saigon.
Pavie, Auguste.
1884. *Excursion dans le Cambodge et le royaume de Siam.* Saigon.
Pracum Roeung Preng Khmaer 6. Phnom Penh.